

日本語教師初任者（外国人児童生徒等）研修

第1回 地域の次世代としての子どもたち—多様性を地域の資源に—

齋藤 ひろみ 先生（東京学芸大学）

1 はじめに

おはようございます。

これまでに、10回の研修を受けていらしたわけですが、今回は、各回の講義の内容について、支援教室で子どもたちと直接接して感じたことに関連づけて、振り返りましょう。皆さんのお手元には、これまでの内容が収められた分厚いファイルがありますね。そのファイルを捲りながら活動したいと思います。

皆さんがこの研修を終えた後に、実際に活動してみよう、こんなことならできそうだと思って、今日この場からお帰りいただけたら嬉しく思います。皆さんの具体的な活動の一步を後押しする考えた方として、今日は「地域の次世代としての子どもたち」というテーマを軸に考えたいと思います。子どもたちの多様性は、この福島の地域の資源になっていくはずです。そうした捉え方で子どもたちの支援活動を行っていくことが大事だと思います。では、始めましょう。

<今日のキーワード>

まず、本日の講座のキーワードをご覧ください。

ライフコース、リテラシーの発達、社会化、キャリア支援、対話を通した内省、ダイバーシティ、地域づくり、異領域との協働です。

2 ライフコース¹

ライフコース研究においては、からだの仕組み、発達過程と社会化、人生の意味や目標とその獲得手段を決める社会文化的背景、そして、最後に歴史的背景やある時代の出来事や精神が、そのコーホートに属する個人の人生体験に影響を及ぼす様相に注目する必要がある。社会化のプロセスに着目すれば、ライフコースの発展と形成は社会的役割の連鎖であり、各段階での役割遂行が人生の満足度につながる。

（J.A.クローセン著、佐藤慶幸・小島茂翻訳『ライフコースの社会学 新装版』早稲田大学出版部）

地域で子どもたちによりそうこと・・・

- ・「地域での暮らし・家族との暮らし」を共に営む
- ・「子どもから大人への成長」を見守る
- ・「地域社会の一員としての歩み出し」を伴走する

¹ ここでは、クローセンのライフコースの捉えをもとに検討します。

まず、ライフコースについて、考えてみましょう。ライフコースという概念ですが、「ライフコース」を日本語に直すと何になりますか。皆さんは、ライフコースということばを聞いて、どんなイメージを持ちましたか。日本語では、人生航路という訳も見られます。心の発達に焦点を当てる場合は、ライフコースというよりは、ライフサイクルという心理学の概念で考えるほうが適当だと考えられます。私は、ライフコースということばを使いたいと思っています。それは、体の仕組みだと生理的な成長発達や心と頭の発達過程に加えて、社会との関係を重視して人の一生の捉える概念だからです。人は、人生の意味や目標と、それらを得たり達成したりするために生きています。それを視野に入れて、子どもたちの成長発達を社会的存在としての将来像を見通した捉えることが重要です。人は、社会的文化的背景や、その時の歴史的な事情と相互に関連をもって生きているわけですが、ライフコースには、そのような社会的存在としての人生を創っていくというイメージがあり、人生航路という訳が、私にはしっくりきます。

ライフコースに関しては、コーホート分析という研究方法があります。コーホートというのは、ある期間に生まれた人々の集団のことで、言い換えれば同時代を、同じ空気を吸いながらともに経験をしてきた同世代の仲間のことです。例えばですが、青春の一曲は何ですかと問われると、同じ曲が思い浮かぶような一団をコーホートと言います。皆さん、よろしければお隣同士で、「私の青春の一曲」が何か話してみただけませんか。どうぞ。

<話し合い 5分程度>

ありがとうございます。「お若いですね」というお声も漏れ聞こえてきましたが、青春の思い出になる曲というのは、もちろん個人の嗜好もあるのですが、どの時代を、どう生きてきたかということの象徴的なものですね。同じ二十歳でも、時代によって生きていた環境も違いますし、社会の価値観も違う。今の二十歳の方はスマホで情報を入手するのが当たり前ですが、私が二十歳の時には、紙媒体で、音は電話、しかも固定電話でした。今のように通信機器を自由には使えない時代です。ですから、情報を得ることはとても大変なことで、その価値や意味は、インターネットで何でも検索できる今とは大きく違います。

私たちが支援しようとしている子どもたちも、最近 10 才で来日した子どもと、20 年前に 10 歳で来た子どもとでは、同じ 10 歳でも、その時の状況も環境も、そして周囲の見方も大きく異なっています。当然ですが、日本で生活する上で直面する問題も違うかもしれないし、困難さの度合いも異なっている可能性があります。実際、20 年前には皆さんがなさっているような支援活動はほとんどなかったでしょう。今は、外国人材の受入れに国が積極的ですけれども、20 年前は国として社会整備をして迎えようという状態ではありませんでした。外国人留学生を労働力として利用するつもりで、就学生を受け入れていた日本語学校や労働させていた企業があったわけです。時代の違いによって、置かれている環境も、周りの人の接し方も違う。そうした中で子どもたちは学んでいるということも、コーホート分析のアプローチが参考になります。

その時代の社会的な状況の歴史的な動きと、子どもの人生の流れが重なっているということを意識して、子どもたちの社会化を捉えて支援していきたいと思います。その上で、特に大事にしたいと思うのが、社会的役割です。私の社会的な役割は、周囲から見れば大学の教員として大学で教鞭をとること、それから、例えば今日のように、講師として何らかの情報を提供したり、皆さんがディスカッションする場を構成したりすること。それが、職業上の私の役割ですし、皆さんにもそのように期待されていることを意識しています。ですが、私

の社会生活はその他にも、例えば家族の中での私のポジション、あるいは、元保護犬をペットとして飼っているのですが、保護犬の里親でもあります。そうしたものも含めて、社会的な役割として考えてみましょう。

子どもたちは、日本に移動して来ることによって、それまでに母国・出身地域で培ってきた知識や経験と結んできた関係性を絶たれてしまうかもしれません。自分の社会的な役割や社会的アイデンティティを、日本で新たに見つけることは、かなり大変なことです。そうした中で、ことばを獲得することは、社会的な関わりを拓いて、新しい社会的な役割を拡張し、重ねることを支えるでしょう。社会における役割を果たし、自己有用感や効力感を感じながら、自尊感情をもって生きていくためには、ことばは重要です。子どもたちの人としての歩み、社会的な存在として生きていく上で、ことばの発達を支援し見守る皆さんの存在は、とても大きいのです。

文化間移動をする子どもたちのライフコースについて検討してきましたが、ここで、かれらのライフコースに寄り添い支援する、地域の皆さんに期待されていることを、大きく3つに整理してみました。一つ目は「地域での暮らし・家族での暮らし」を共に営むことです。子どもたちの家庭に直接入り込んで支援する必要がある場合もあるとは思いますが、ここでお伝えしたいことは、子どもたちの地域での暮らしを支えることが、家族ぐるみの地域参加を促すことに結びつく可能性があるということです。子どもたちが地域の活動に参加する。それをきっかけに家族も地域社会に出てくる。それが循環することで、地域社会に外国人住民が位置づいていく。皆さん方には学校の先生とは違う点として、そうした力をお持ちだと思います。

二つ目は「子どもから大人へと成長する過程」を見守ることです。学校の先生方のお話を聞くと、先生方が担任として子どもと過ごす期間は2年ぐらいですね。この前、新潟県上越市に行ったのですが、上越市の小学校では、先生方は3年程度で「そろそろ異動」なのだそうです。5年経てば必ず異動だとおっしゃっていました。つまり、子どもを数年見たが、次の年には他の学校へ異動というケースが多々あるということです。それに対して、皆さん方は、子どもが成人して社会の一員として自立するまで、継続して見守り支えることができます。先日、川崎市の人権フォーラムでお話をしたのですが、会場には、長年ボランティア活動をなさっている方も多数いらしていました。その中のお一人は、中国の青年を「乳母車に乗っていたころに出会ったのですが、就職して働くようになったんですよ。これまで、20年以上一緒に活動してきました」と紹介してくださいました。支援の対象だった子どもが、成長して支援者仲間になっているのです。このように、関係を結び直しながら、長い年月を共に生きることができなのが、皆さん方なのです。

そして、三つ目は、子どもたちが社会的役割を負って「地域社会の一員として歩み出そう」というとき、かれらの伴走をするという役割です。一人ではできなくても、皆さんが伴走することによって一歩踏み出せるようになるかもしれません。それは、子どもたちが進路選択に迷ったときに、皆さんが職業経験を語ることで、子どもたちが自分の学力や能力に自信が持てないときに、皆さんが見せる社会経験で身につけたスキル、それらが、子どもたちに社会への扉を広く大きく見せてくれるに違いないのです。学校での教育では提供できない、価値観や物の見方、人の生き方などを示して、子どもの背中を押し、社会への第一歩を踏み出す支援になると思われます。

3 ダイバーシティ（多様性に拓かれた社会）

個人のライフコースは、社会の状況や歴史的な流れと大きく関わりながら動いているという話をしました。ですので、日本社会がどれほど多様性に開かれているか、つまりダイバーシティが進んでいるかどうか、文化間移動をする子どもたちのライフコースにも大きく影響するということになります。ここにいる私たちは、

多様性に拓かれた社会を創りたいと思っている者の集まりだと思います。そこで、多様性に拓くとはどういうことなのかを、具体的な例を通して考えてみましょう。次に紹介するのは、この数か月、私があちこちにお伺いして、直接耳にしたことです。この4つの発言から、子どもたちが生きている社会のダイバーシティを現実的な問題として、考えてみたいと思います。

スライドの発言1について紹介します。あるネパール出身の小学6年生の女子児童が、日本語の授業で、卒業前に将来の夢について「将来はフライトアテンダントになりたいから、勉強を頑張る」と語った時のことです。それを聞いて先生が、「〇〇さんは、英語がまあまあできるから、きつになれるよ。フライトアテンダントに」と語りかけ、さらに「それに美人だし」と声を掛けました。その子は、この声かけに対してほとんど反応しませんでした。理解できていなかったから無表情だったのかもしれませんが、フライトアテンダントになるために日本語の勉強を頑張ると言っていたこの児童へ、励ましのつもりでその先生はおっしゃったのだと思いますが、皆さんはどう感じますか。

ダイバーシティ (多様性に拓かれた社会)

次の4つの発言について、どのように感じますか。そして、「多様性に拓かれた社会」とはどのような社会なのか、考えてみましょう。

発言1

「将来は、フライトアテンダントになりたいから、勉強を頑張る！」と言ったネパールの女子児童（小学6年生）に対する教師の発言
「Aは、英語がまあまあできるから、きつになれるよ。それに美人だし。」

発言2

中学3年生の日系ブラジル人の生徒の発言
「高校へは行かない。卒業したらコンビニでバイトする。だって、〇〇製作所は、18歳になったら、中卒でも雇ってくれるもん。」

発言3

外国人の子どもに対する学校長の発言
「日本語ができるようになってから来てください。」

発言4

外国人住民への日本語教育や子どもの支援についての協力を求める行政職員に対する、外国人の派遣業者の発言
「私たちは、市に税金を払っていますし、外国人の労働者も所得税・消費税を払っています。あとは、市の行政がやるべきことですよ。」

次の発言2は、中学3年生の日系ブラジル人の生徒の発言です。これは、ある地方都市を訪問したときに先生から聞いた話です。中学3年生のその生徒に、先生が「進学どうする。高校に行った方がいいんじゃないの」と声を掛けると、「高校へは行かない。卒業したらコンビニでバイトする。だって、〇〇製作所は18歳になったら、中卒でも雇ってくれるもん。だから、3年間コンビニでバイトして暮らせば、雇ってもらえるから高校には行かない」と応じたそうです。皆さんは、どうお考えになりますか。

発言3は、以前からよく話題になっていますが、今でも、同様の発言は少なくないようです。外国人の子どもが編入を希望して来た時に、学校長が次のように応じているそうです。「日本語ができるようになってから来てください。あそこに塾みたいな良い教室がありますから、あそこでまず勉強して、日本語が話せるようになってから来てください」と。そして、校長先生は、その教室に「〇〇から、日本語ゼロの子どもが来たから

よろしく」と電話があるそうです。教室の担当者の方は「私たちは、もちろん一生懸命に教育をします。でも、これでいいんでしょうか」とおっしゃっていました。

最後に、発言 4 ですが、これは教育行政の方から伺ったことです。外国人材派遣の業者に、外国人住民の日本語教育や子どもの支援についての協力をお願いすると「私たちは、市に税金を払っています。市はそれで潤っているじゃないですか。それに、外国人の労働者も所得税も消費税も払っています。この市は、私たちが外国人を連れてきたおかげで税収があるわけですね。であれば、その家族や子どもの教育をするのは市の教育行政のあなたたちでしょう」と言われるそうです。その行政官は、全く協力してくれないと嘆いていました。

これらの発言は、全国各地で起きていることの象徴的な出来事で、よく耳に入ってきますが、こうした状況は日本社会の「ダイバーシティ」という点から見たときに、どうとらえればよいのでしょうか。皆さん、発言 1~4 について話し合ってください。各グループとも、4 つの発言の中から、2 つを選んで話し合ってください。私は、理想的にはこうあるべきとバイアスのかかった紹介の仕方をしました。現実的にはそんなに簡単じゃないという意見があってもおかしくはありませんので、そうした意見も含めてお話ししてみてください。

では、まず発言を 2 つ選んでください。それから、話し合ってください。10 分くらい時間を取ります。後で、話し合いの結果をお聞きしたいと思います。では、お願いします。

<グループで話し合う>

はい、ありがとうございます。理想論としてはこうだというのは簡単だけれども、実際に解決するにはどうするかということになったときに、お立場や考え方によって、必ずしも一つの答えにはたどり着かない問題ばかりかと思います。これから、ご意見をいただきたいと思いますが、話し合ったことを皆さんで共有するに当たって、それぞれの発言の背景にどういう問題が潜んでいるのかを、これまでの講座で学んできたことに関連付けて発表いただきたいと思います。もう 2 分くらい時間を取りますので、もう一度話し合ってください。例えば、発言 1 については、外見に対するステレオタイプや偏見、あるいは差別になるかもしれない、というように捉え直すことができるかもしれません。あるいは、発言 3 に関しては、学習権、教育権の問題に関連があるという見方ができるかもしれません。皆さんで、発言の 1, 2, 3, 4 について、これまでの講義で学ばれた概念や物事の捉え方に関連づけ見てください。

<グループで話し合う>

はい、ありがとうございます。それでは、グループのまとめではなくても構いませんので、こんな話し合いをしました、私こう感じましたということを、各グループからお一人、一言いかがでしょうか。

発言 1 についていかがですか。

【受講者】

私たちのグループでは、発言 1 については取り上げませんでしたが、個人の意見として発言します。

「美人だし」というのはある意味で差別になるような考え方だと思います。せっかくこの子が勉強を頑張ると言っているのに、「英語もまあまあできて美人だし」という先生の考えは、その子のために全くなっていないというか、勉強を頑張らなくなってしまうような発言だと思いました。

「美人だし」という発言に関しては、美人と言われて嬉しい子たちもいるかもしれません。容姿について褒めることや褒められることが日常的に行われる文化もあります。しかし、教員が公的な場で、見た目でその人を評価するということは控えなければいけないと考えられます。その前の、「英語がまあまあできるから」という発言についてですが、この児童は、ネパールで英語を勉強していますので、それを資源として生かすことも期待したことです。しかし、児童は、日本で勉強を頑張ると言っているのですから、子どもの意志を尊重しているとは考えにくいです。彼女が、今努力しようとしていることの応援にはなっていない点で、残念な発言です。こちらのグループでは、言語的マイノリティとマジョリティという関係を考慮すると、この発言には、更に大きな意味を持つと、お話しされていました。つまり、政治的、経済的に力をもつ言語である、英語には価値があると言っているようなもので問題だということです。

次に、発言2についてはいかがですか。多くのグループが取り上げていましたが、どなたかどうぞ。

【受講者】 発言2は、今まで学んできた「キャリア形成」に非常に関わる問題だと感じました。私たちのグループでは「中卒で就職するという選択肢もある。そういう選択肢があってもいいんじゃないか」というような意見がありました。けれども、そのような選択をするに当たって、日本の現状では、中卒だとやはりさまざまなデメリットというものがあるということを、きちんと子どもに伝えていく必要があると思います。理想論にはなりますが、日本が、学びたいときにいつでも学べる社会になればいい、学びの多様性を実現するといった感じました。

ありがとうございます。学校の先生と子どもたちに「頑張れ」と言うだけじゃなくて、社会が仕組みを作る必要があるということですね。家族滞在で来ている子どもの就業に関しては、制限があります。定住者家族の家族滞在であれば28時間の資格外活動が認められています。そうではなくて、自分自身が職業人として、就労ビザを取るときには、就労ビザを得られる職種にかなければなりません。今、そういう職種は多くの場合、専門学校や大学などの高等教育を受けて得ている仕事です。そうすると、中卒で〇〇製作所が雇ってくれたとして、〇〇製作所が本当にずっと雇用してくれるという保障はないわけです。外国人の派遣労働者としての雇用であれば、経営状況によって真っ先に解雇される可能性も強く残ります。解雇によって、〇〇製作所の仕事が無くなった、どうしよう、次の仕事を探さなければとなったときに、次の職業を得られるかどうかわかりません。この中学生が、自分で選んだ進路かもしれませんが、今のご発言のように、十分に情報をもって選択しているとは考えにくいです。自分の将来についての様々な選択肢や条件を十分に考えた上で、高校進学をしないと決断したのであれば、そこで、もう一度次を考えることもできるかもしれません。しかし、目の前にぶら下がっていた「〇〇製作所」に行けばいいやと思って勉強をやめ、高校進学をやめたとなると、次のキャリアをどう考えればよいかかわからないのではないかと思います。非常に困った状態になります。子どもたちが進路を選択し、社会参画するに当たっては、滞在資格、就労ビザと職業との関係等の知識、物事の捉え方、そして自立した人間として判断する力をつけることが必要です。発言2を耳にしたときに、この点を私も改めて強く意識しました。

それでは、発言3について、話し合ったグループの皆さん、どうぞ。

【受講者】日本語ができるようになってから来てくださって、校長の権限は大きいと勉強したのですが、集住地域ではそういう子どもをすぐに受け入れて、学校内でも指導の流れを作れると思います。けれども、散在地域では数年に1度子どもが一人来るといった状況で、学校内で日本語教育の体制を作って受け入れることはできないので、こういう話になったのではないかと思います。散在地域では、受け入れ体制がないところに問題があるのではという意見がでました。制度がないために、発言3のような校長の発言になったのだらうと思います。

ありがとうございます。確かに散在地域では、子どもたちを支援する仕組みが何もないところがたくさんあります。突然、外国人児童生徒が編入したいと来たら、戸惑うのは当然だろうと思います。体制づくりについては、外国人児童生徒等18人に教員一人を配置するという定数化が進められるなど、国も少しずつ体制を整えようとしているようです。ただ、制度が整うまで何もできないとなつては、その間、子どもたちは放っておかれることになります。それでよいのでしょうか。もちろん、「良いはずがない」ですね。

上越市には、複式学級がある小さな学校に外国人の子どもが一人いるそうです。その学校では、校長先生が、その児童に日本語指導をしています。時間があるときにはではなく、曜日と時間を日本語指導の取り出しの時間と決め、その時間に校長先生が全面的に指導しているということでした。小さい学校だからできるという点もありますが、現体制の中でできることを探って、一つ一つ実施してみるということが、やはり大事なことだと思います。きっと、他地域でも、校長や学校の志で、こうした取り組みを行っているところがあるはずです。

地域の皆さん方に学校に入って、サポートをしてもらうという自治体・教育委員会もありますが、各自治体・学校によって、その積極性はだいぶ異なります。地域支援者としては積極的にかわりたいてと考えても、うまく連携できない場合もあります。皆さん方の活動が見える化されれば、学校から声がかかるかもしれませんし、こちらから声をかけたときの対応の仕方にも変化が生じるのではないかと思います。さきほどは、福島で実施される地域支援のフォーラムが話題になっていましたが、それをきっかけにして広げていくことも大事だろうと思います。

学習権について確認しますと、理想論だという声もありますが、やはり心に留めて考えなければいけない問題です。理想がないことには教育は成り立ちません。子どもが教育を受ける権利については、これまでの講座でもお話があったかと思いますが、日本国憲法では国民が義務教育の対象となっています。ですので、義務教育の対象は日本国籍の者となるのですが、国際法を見ますと、すべての者の権利を教育については認めることになっています。外国籍の子どもであっても、当然ながら教育、子どもが学習することを保障することが求められます。それを、どのような立場の人がどういう責任をもって、システム化して行っていくかについては、日本の法律には難しいところがまだ残っているということです。子どもの権利条約でも、子どもの最善の利益や子どもの生命・生存・発達の権利の中の社会権の一つとして、学習権が謳われています。日本も国連のメンバーですし、国際人権法の批准を1979年に行っています。基本的には子どもの学習権を保障する方向で動くことが望ましいのです。

関連のあることですが、学齢超過の方の就学に関しては非常に難しい状況があります。「16歳で中学校をまだ卒業していません。日本の中学校に入れて欲しいです」というようなケースです。学校が、年齢が中学生の年齢を超えているから受け入れられないと判断する場合が少なくありません。一方で、卒業はしていないから18歳位までなら編入を認める場合もわずかですがあります。そこで、夜間中学校の存在がとても大きくなりま

す。現在、各地で、夜間中学校を残す・作る動きが見られます。夜間中学校で一生懸命勉強している外中学校年齢より少し上の外国人の生徒さんがいます。

中学校を卒業して来た場合には、日本の中学校は受け入れないというケースが多く見られます。その場合、高校に入学して、勉強を続けて日本語の力も高めたいと考える若者も多くいます。しかし、来日直後で日本語がまだ十分にはできない、日本の教科教育についての経験もないとなると、なかなか高校受験を通過して入学することは難しいわけです。そうした中で、地域の支援教室で学んだり、私塾のようなところに通ったりするケースがよく見られます。義務教育の年齢も過ぎている、義務教育に当たる教育はもうすでに修了しているという場合、教育を保障する制度の外側に出てしまうのです。中学卒業年齢以上の若者の教育機会については、制度的に整えていく必要があります。何とかしていかなければならないということで、今、強く関心が寄せられている問題の一つです。

では、発言4について、検討しましょう。

企業の発言について、「おっしゃるとおりです」と言って引いたら、動かなくなってしまう。もちろん義務としての税金は支払っているわけですが、社会を構成する組織体として、この地域を土壌としてその企業も成り立っているとしたら、やはり地域の活性化や地域の発展等のために何らかの貢献をすることに、積極的になることを求めたいと思いませんか。教育行政からの働きかけには動かないのであれば、戦略としては教育行政ではなく、別のところから働きかける方法もあるかもしれません。子どもの教育ではなく、大人の就労に関しては、教育行政ではなく、就労関係の行政部門が管轄することになります。そちらから働きかけるといったことも戦略として考えながら、企業を地域づくりに巻き込んで行くことが必要だと、この発言を聞いて思いました。

4 日本生まれ日本育ちの子どもたちの教育課題 ―グエンさんのライフコース²より

グエンさんのライフコース（スライド参照）をもとに、文化間移動をする子どもたちのリテラシーの発達について検討しましょう。

<グエンさんのエピソード>

グエンさんのライフコースの例は、これまでの講義で、あるいは実際に支援活動をして感じていらしたことをエピソードとして整理したものと考えて、見てください。実際にグエンさんという子どもがいたわけではないのですが、私があちらこちらの学校にお伺いし、先生方から伺った実際にあったエピソードをもとにしています。それを、日本生まれのベトナムのインドシナ難民のご家庭で育った子どもの姿・ライフコースとして再構成したものです。日本生まれのグエンさんのライフコースのエピソード①から⑤までをご覧ください。お隣の方と、それぞれどのようなエピソードか想像し、滞り期間や、発達の状況、家族との関係などに着目して話し合ってください。グエンさんの場合は、日本生まれ、日本育ちなので、滞り期間といっても年齢そのものなのですが。では、どうぞ。

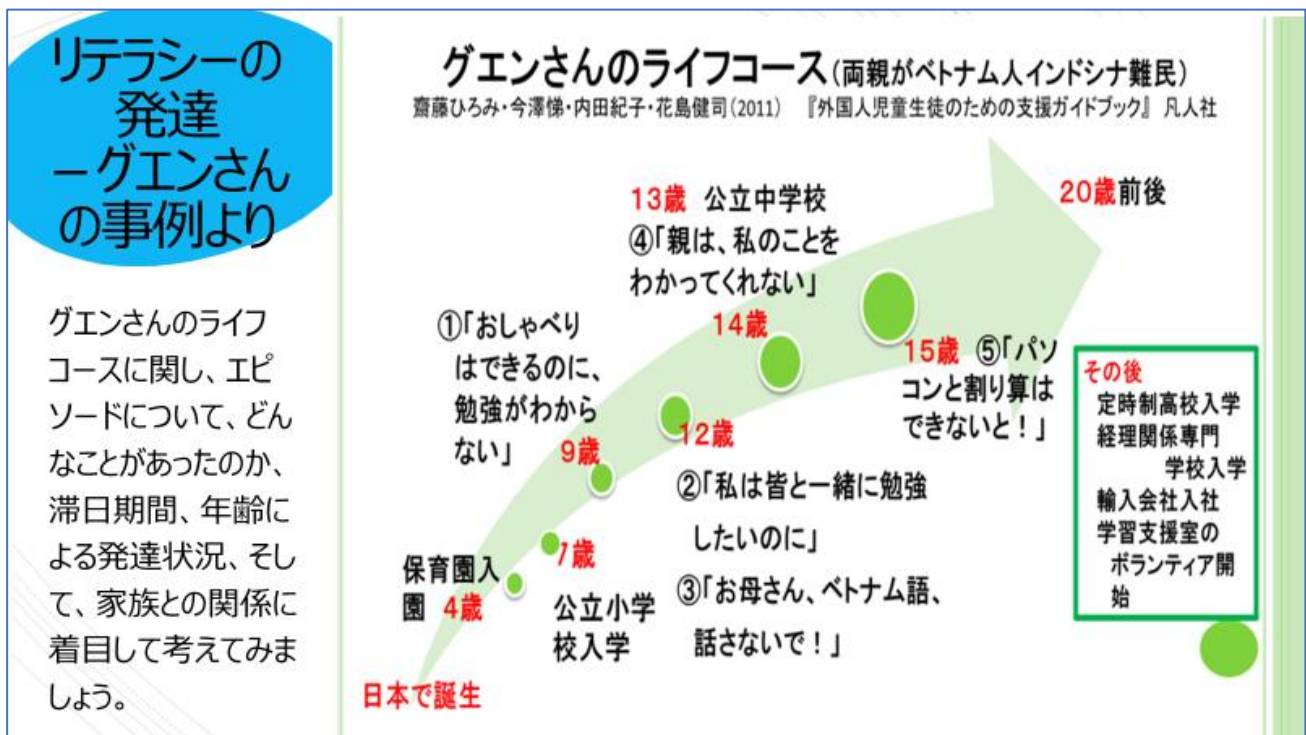
² グエンさん、および次に紹介するカルロスさんのライフコースは、齋藤他（2011）からの引用です。齋藤ひろみ・今澤悌・内田紀子・花島健司（2011）『外国人児童生徒のための支援ガイドブックー子どもたちのライフコースによりそって』凡人社

<グループでの話し合い>

ありがとうございます。

イメージが作られたところで、エピソードを具体的にお話しさせていただきます。①「おしゃべりはわかるのに勉強はわからない」は、言語発達と教科学習との関係にかかわるエピソードです。グエンさんは日本で生まれ育って公立学校に入り、その小学校1年の段階では取り出しの日本語指導は必要ないと判断されました。ところが、3年生になったところ、9歳ですね、学校の教科内容があまりわかっていないことに教師が気づきます。グエンさんの様子を見てみると、おしゃべりができるのに勉強がわからない、日本語の力が弱いのではないか、あるいは発達上の課題があるのかもしれないと心配し、改めて対応を考えることになったというエピソードです。一緒に考えてみましょう。

②のエピソード「私はみんなと一緒に勉強したいのに」は、「取り出しの日本語指導」を、誰にとって、何のために行うのが問われるエピソードです。グエンさんは、9歳でいったん取り出し指導を受けた後、10歳から通常学級でのみの学習を続けていました。6年生になって担任の先生が、もう少し日本語、特に漢字の力や語彙の力を高めておかないと中学校に入ってからたいへんだろうと、取り出し指導が再開されます。ところが、取り出しの時間帯が社会科の調べ学習の時間に重なっていたこともあり、グエンさん自身は、「皆と勉強したいのになぜ私だけ取り出しなのか、グループ学習で自分の役割があるのに、何得できない」と感じているというエピソードです。「漢字わからないのは私だけじゃない。隣の〇〇くんだって」とグエンさんはぼやいています。グエンさんの学習への参加をどう考えるかが問題になりますね。この発言ですが、実は、学校の先生方



からもよく聞こえてきます。「勉強がわからないのは外国人の子どもだけじゃありません。なぜ、この子だけ特別に扱う必要があるのですか？」と。この場合は、このエピソードとは逆に支援をしない理由としての発言です。

そして同時期のエピソードとして、③があります。お母さんと近く買い物に行ったときに、お母さんが「グエン、どんなのがいいの」とベトナム語で話しかけると、グエンさんが「お母さん、ベトナム語話さないで」と言ったというエピソードです。グエンさんはそれまでに、周りの人から「あ、ベトナム人だ」とささやかれたことが何度もあり、外に出たらベトナム語を話さないほうがいいと思うようになっていました。グエンさんには姉がおり、日本語ができるので、家庭内でも姉との会話が主で、日本語で生活しています。ベトナム語の力はあまり発達しておらず、母親がベトナム語で話しかけても日本語で返すし、複雑な内容はベトナム語では理解できない状況でした。そんなときの出来事です。ここで考えなければいけないことは、母語、母文化と民族的なアイデンティティ、そして家族との関係です。

次のエピソード④は、13歳（中学2年生）の頃の、進路に関する家族の文化や歴史にかかわるエピソードです。学校で先生と進路に関する話し合いで、親御さんは「グエンにはベトナムと日本の懸け橋になるような仕事をしてほしいし、社会のためになる医者、弁護士になってほしい」と語ります。父親と母親はタイの難民キャンプで過ごし、自分自身が教育を十分に受けてられなかったため、子どもには教育を受けさせたいという強い思いがあります。まだ、経済的に不安定だったため、グエンさんの姉には高校に行かせられなかった、だからこそ、グエンさんには高校・大学と進んでほしいと強い期待を寄せています。しかし、グエンさんは「私は勉強できないし嫌いだし、弁護士とか医者とかなれっこない。親は私のことをぜんぜんわかっていない。それに、私はベトナムに行ったこともないし、ベトナムのことも知らないのに」と思っています。高校・大学で何が学べるか具体的なイメージがないままに、将来像が描けないままに15歳になります。そして、エピソード⑤では、その気持ちを地域のボランティア教室の支援者に吐露します。お姉さんのように、お弁当屋さんで働いて自分でお金を稼いで、好きなように遣いたいと。支援者のおじさんの「就職するにしたってパソコンと割り算くらいできないと就職なんかできないよ」ということばに、高校で勉強してから就職しようと思い直します。日本生まれのお子さんの場合、この①のエピソードに示される学習参加のための日本語の力の問題と、③④のエピソードに代表される親との関係や母語、母文化の発達・維持、そして④⑤のエピソードの進路が、実は深刻な問題になることがあります。

<リテラシーの発達と学習参加>

グエンさんのエピソード①を読んで、グエンさんの状況に関する教師の見立てについて、話し合ってください。

特別支援の ニーズ？

グエンさんのエピソード①

「おしゃべりができるのに、勉強がわからない」

3年生になって、グエンさんは休み時間や活動中心の授業では、日本人の子供たちと同じように活動しているのに、算数や国語の授業になるとボーッとする様子が目立つようになりました。担任の先生が、勉強したことについて尋ねてみると、やはりわかっていません。まとめのテストもほとんど書けませんでした。日常生活には問題のないレベルの日本語の力をもっているのに、日本語でまとめた内容を伝えることや、文章を書くことができないのです。先生はもしかしてグエンさんは、発達に問題があるのかもしれないと心配するようになりました。

次に、グエンさんのエピソードの①をめぐって、言語の力と教科等の学習への参加の力について詳しく考えてみましょう。簡単に言えば、「おしゃべりはできるのに勉強がわからない」ということです。では、少し時間を取りますので、エピソード①をお読みになって、隣の人と何が問題になっているのかを確認してください。

<ペア・グループでの話し合い>

グループで話し合ったことを紹介してください。

【受講者】このグループでは、3年生になると抽象的な概念が増えて教科内容が一気に難しくなるが、抽象度の高い学習は、もうワンステップ日本語の力が必要なのではないかと。また、困っているのが国語と算数なので、他の科目、例えば社会科には日常の会話やテレビのニュースで情報を得て何とかついていけるが、国語・算数は経験的に学ぶことが難しいから困っているのだろうとまとめました。

【受講者】この子は日本生まれなので日本語はできるのでしょうけれど、1時間1時間の授業の学習内容がわからず、うちでも宿題ができないから、わからないことがそのままになってしまい、それが積み重なって3年生では、教科内容が理解できなくなったのではないかと。また、このエピソードの先生が思うように、もしかしたら学習障害があるのかもしれないという、2つの可能性があるという話になりました。

教科の内容、子どもの言語発達、子どもの社会的な経験、そして、家庭の学習環境と多様な角度から分析的に読み解いてくださったようです。ありがとうございます。

特別支援教育の対象になっている児童生徒 4%強、学習面・行動面で困難が大きい発達障害と考えられる児童

は6%程度いると言われています³。外国人児童生徒にも、同程度の割合で特別支援が必要な子どもが存在すると思われます。ですので、グエンさんに発達上の課題がある可能性はゼロとは言えません。しかし、日本語が十分に理解できていないことが原因になっている可能性が残されているのであれば、やはり、まずは日本語の力を高めるためのサポートをする必要があると思います。というのも、一旦、特別支援教育のトラックに乗るとそのラインから通常クラスでの学習に戻ることは難しいと考えられるからです。特別支援の学習が始まると、その学年の教科の内容の認知的な力や知識は求められなくなります。当然、通常クラスの学習からは離れてしまいます。先生方も、特別支援の子どもとしての成長を願っているわけですが、学習面の発達については、通常学級の子どもたちと同様には期待されなくなると考えられます。特別学級での学習が長くなれば、やはり、一般学級での学習に戻るのとは相当に困難だと考えられます。

では、言語の力として、グエンさんにはどんな課題があるのでしょうか。よく、問題にされるのが、語彙の力や漢字の力です。ですが、教科学習に参加し、教科内容を理解するための言語のとしては、学習言語能力と呼ばれる力が必要だと言われています。日常の、対面での口頭でのおしゃべりの力が生活言語能力、教科等の学習に参加するため思考を支える言語の力が学習言語能力です。その力は、語彙や漢字の力も含みますが、それだけではありません。この点を、後で行うワークショップを通して、考えてみたいと思います。

そして、グエンさんのように日本生まれ日本育ちの子どもの場合は、小学校に入る前までに触れてきた言語のインプットとその質と量が、家族が日本語日本文化のご家庭とは違うであろうことが想像できます。小学校入ってから体系的に読み書きの学習を始めるという点では日本の子どもと同じで、一斉にスタートできるとおっしゃる方もいますが、実は、準備状態は全く違うのです。日本の家庭の子どもが、読み聞かせを経験し、文字は読めないけれども文章表現に触れる経験をしている子どもが多いと思います。文字に触れ、書きことばとの接点をもつことで、プレリテラシー、或いは萌芽的リテラシーと呼ばれる力が育まれています。プレリテラシーをもとに体系的計画的な学校での読み書きの学習を通して、リテラシーの力、つまり、テキスト（文字でかかれたもの）を理解したり、テキストで表現したり、またその力を活用する力が発達します。一方外国人のご家庭では日本語の文字や書きことばには全く触れずに学校に入学している可能性もありあす。両者では、文字の読み書きはもちろん、文章を読んだり書いたりして理解・表現する力の発達には、差が生じると考えられます。グエンさんは、小学校1年生のときには日本語指導などの特別な対応をしてもらえなかったのですが、友達と一緒に活動する上では問題はなかったけれども、文字の学習でケアがなかったために、リテラシーが十分に発達していなかったという可能性があるのです。読み書きは思考力の発達とも関連が有りますから、3年生になるまでに、学力面での困難が大きくなったと考えられます。小学1年生から、日本の学校で同じように教室に座って学んでいても、その前の言語生活や言語の力の違いによって、学習における困難が生まれる恐れがあることを意識し、できるだけ小さい頃から支援をすることが必要です。

5 活動1－漢字学習の活動を考える

ここまで、学習への参加とリテラシーの発達についてグエンさんの例を見ながら考えてきました。そこで、ここで、子どもを対象とする漢字学習活動を考えていただきます。

³ 文部科学省

https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/2019/09/_icsFiles/afieldfile/2019/09/24/1421554_3_1.pdf
(2020年3月最終アクセス)

<活動1の内容>

活動を考えるに当たり、3タイプの対象児童生徒を想定します。アロヨさん8歳、張さん11歳、スザンさん13歳です。この3人の子どもから一人を選んで、漢字指導について計画を立てたいと思います。

グエンさんに近いのはアロヨさん8歳ですね。ことばの力が弱いです。張さんは滞日1年ですが、10歳まで中国で暮らしていたので漢字についての知識をかなりもっています。ただし、中国語の漢字です。そして、スザンさんは、滞日3年になるのでおしゃべりはできます。しかし、漢字の語彙については、読みがわからないから辞書も引けない、意味もわからないからドリルをやっても手を動かすだけという状態が続いています。それでも、勉強自体は好きで、日本の戦国武将に興味を持っています。

まず、この3人のどの子どもを対象にするか、グループで相談して選んでください。

活動1

次の3人の子どもたちに、漢字学習の支援をします。

- ①どの漢字を選んで、どのような活動で、支援をしますか？
- ②3人グループになって、考えてみましょう。
- ③利用する教材や教具なども工夫してみましょう。

アロヨさん 8歳

(フィリピン 滞日1年)

ようやく仮名の読み書きができるようになってきました。これから、漢字の学習を本格的に始めます。2年生になって、教科書の漢字も増えてきましたが、まずは、基礎的な漢字を学ぶ必要があります。でも、単純な暗記やドリルは飽きてしまいます。

張さん 11歳

(中国 滞日1年)

学年配当漢字は、ほとんどの意味がわかります。ただ、読み方で苦労しています。また、中国語の漢字の字形で書いて間違ってしまうことがあります。在籍学級の教科書学習でも、内容はわかっているけど、漢字が読めないことが少なくありません。読めれば、もっと積極的に発言できるはずです。

スザンさん 13歳

(ネパール 滞日3年)

日常のおしゃべりは十分にできますし、基礎的な日本語の文型も身に着けています。ただ、漢言語彙は、漢字の読みがわからず辞書も引けず、意味がわからないのでドリル練習は手を動かすだけになっています。勉強自体は好きで、特に、日本の戦国武将に興味をもっています。

それぞれ、次の資料を参考にしてください。

- ・アロヨさんを対象とする場合：市販の漢字教材『かんじだいすき 二ねんせい』（スリーエーネットワーク）の小学2年生の配当漢字
- ・スヨンさんを対象とする場合：栄光セミナーちびむすドリル「人の武将と全国統一」(https://happyilac.net/eikoh/pdf/ek2017-s6_social_6-1-01.pdf)
- ・張さんを対象とする場合：「子どもの日本語ライブラリー」(JYPプロジェクト：http://www.kodomo-kotoba.info/booklet/basicsearch_booklet.html)

活動計画を立てたら、模造紙に書いて発表していただきます。

活動計画では、授業のタイトル、対象児童、活動の目標、活動の展開を考えてください。活動の目標を考えるとときには、読み方（音）、書き方、意味とを区別し、意識してください。漢字の形を認識すること、読み方

を知ること、意味がわかることは異なる知識・技能です。目標を設定するときには、漢字の読み・音を正しく覚えることなのか、字を正しく書けるようになることなのか、意味を理解して漢字語彙を使えるようになることなのか明確にして設定しましょう。また、段階的に力を高める問いことも大事ですから、今日は漢字を見て読めればいい、読めなくても漢字を見て意味がわかれば良いというように設定してもよいでしょう。ただし、読みだけの練習、書くだけの練習ですと、どういう意味かを知らないままに、何度も練習させてしまう場合があります。それでは練習の意味がなくなりますから、必ず漢字の意味については理解させてください。そして、最終的には、どんな意味で、どんなふうに使えるのかを活動を通して、学べるようにしてください。

活動の例ですが、アロヨさんであれば、漢字を覚えやすいようにグループ分けし、自分の漢字手帖を作るとかでもよいですね。1回の活動で学漢字は多くても5つぐらいにしてください。アロヨさんであれば、3つでも良いかもしれません。漢字の単語を個別に覚えさせるのではなく、使い方を含めて学べるように、できるだけ例文を示して教えます。また、どの活動で、どんな教材を利用するか、作成するかも考えて記入してください。

<漢字活動の計画を立て、ポスターを作成する>

<漢字活動の計画の発表（ポスターセッション）>

各グループに、一斉に発表をしていただきます。前半、後半の2回の発表です。

前半に発表する方と後半に発表する方を決めてください。前半発表しない方は、他のグループの発表を聞きにってください。

<ポスターセッションの振り返り>

ありがとうございました。それぞれいろいろなご感想やコメントをいただいたようですし、他のグループの活動を見て感じられたことがあったかと思います。皆さんと共有したいということはありませんか。ないようですね。では、私から、活動の例を紹介させていただき、その後、皆さんが作成した活動計画についてコメントさせていただきあす。

光村図書の4年生の漢字の扱い方に関する指導計画例⁴から紹介させていただきます。光村の国語科の教科書には、「カンジーはかせ」という単元名の、漢字について学ぶ単元が1年に数回組み込まれています。5月の「カンジーはかせ」単元では、都道府県名を使った文を作ろうという活動で構成されています。社会科の授業と教科横断的な学習活動です。「都道府県の旅」というテーマで、都道府県名を使って文を考えて書くものです。外国のお子さんの場合は、旅というテーマですと難しいかもしれませんが、例えば今日、「東」という漢字を勉強したら、「東」という漢字が入っている都道府県はどこだろうねと地図で探す活動などができそうです。では、「山」はどうでしょう。はい、「山形」「山梨」「富山」「和歌山」「岡山」「山口」の6つの県。このようにして、社会科の教科の内容そのものを学習するのではなくても、4年生が学習のどのような場面でどのような漢字に出会うのかを、教科と少し結び付けて学べるようにすることができます。子どもたちが在籍学級に戻って社会科などの学習に参加する時に、この漢字学習が生きてくると思います。

そういう点で、張さんを対象としたグループは、張さんが関心のある歴史の内容に漢字に関連づけて扱っていただきました。こちらのグループの活動計画で面白いのは、歴史的なエピソードを聞いて、武将の名前カー

⁴ https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s_kokugo/keikaku/02s_k_nenkei4_03.pdf

ドを取るという活動です。名前カードを取る活動は、読んでわかる力です。ウエスギケンシンという音を聞いて、文字列として「上」「杉」「謙」「信」と漢字が4つ並んでいるカードを見て、あの武将だと名前カードを取る。その活動が最初です。次に、エピソードについて感想を書く活動がありますが、そこでウエスギケンシンの名前を、漢字で上杉謙信と書くというように、段階的にスキルを高めています。そして、歴史の出来事を漢字学習に結び付けているため、教科の内容の学習にもなっています。もう一つのチームも、社会科のワークシートの文章をやさしく書き換えて、歴史の内容を理解する活動を行っています。そして、その文章に出てくる漢字を学活動です。スザンさんは歴史が好きで、一定の予備的な知識を持っているから、それを発揮する場を提供し、漢字の学習に結び付けようとしています。こうした活動を行うには、子どもの実態として、関心・興味を把握し、学校の学習状況に連動させることが必要になります。

次の指導計画にある例は「漢字の広場」6月の学習内容です。絵を見てそれぞれの場面を想像し、提示された言葉を使いながら夏の楽しみを文に書く。その時に漢字を使うという活動が提案されています。提示された言葉を使いながら、夏の楽しみを文に書くのが、支援対象の子たちにできるかどうかは、その子の力にもよるし、想像力にもよります。ですが、絵を見て、絵に出てきたものを漢字で表すという活動にすると、漢字が必ず意味と結び付けられます。文字を一生懸命練習したけれども意味はわからなかったということにはならないですね。ですので、スリーエーネットワークから出ている『かんじだいすき』も、ユニットごとに絵があって、そこに漢字が示してあります。その考え方を参考にして、例えば、子どもが運動会の写真を持っていれば、その写真を見ながら、「走りました。一位です。うれしい！」と文を作って、「走」「位」という感じを学ぶ学習ができます。単に字として漢字を書くだけではなく、子どもの今の体験を可視化できる視覚的な情報を提供したり、あるいは持って来させたりして、その経験と学んでいる漢字を結び合わせることで、漢字学習がもつ意味がかわりますね。訳も分からず漢字を何回も書かせるということにはならずすむと思います。

それともう一点、こちらのグループが日本の漢字と中国の漢字を比較するということがあったんですけども、きっと普段間違っていて、先生にチェック入れられているのかもしれませんが。自分で間違いを探したり正したりするという活動も、小学校の4年生以上であれば、メタ認知といって自分の行ったことを自分で評価するような力も入ってくるので、学習した漢字を使って例文を作った後、もしかして自分で中国の漢字か日本の漢字か、どっち使っているか調べてみようねとかということをやってもいいかもしれません。

そちらのグループは来日1年目なんですけれども、教室環境あるいは学校環境の中にあふれている漢字を探すという活動をします。それは教室の中の教科書で出てくる漢字が、実は私たちの生活の日常の中でどのように使われているかということを知る社会化の促進といえますかバックアップをするようなことになると思いますし、その経験があつて書くとなると、「あつ、あそこの昇降口にあつた『走るな』の『走』だ」というように記憶にもうまく残っていくかもしれないと思います。

6 思考力を育む「ことばの学習」支援—タキシノミー（教育目標分類）⁵からのヒント

⁵ Anderson, L. W., et. al. (2001). A Taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing: A Revision of Bloom's Taxonomy of Educational Objects, Longman.

日本語訳・表は国立教育政策研究所（2013）『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』をもとに作成。

教科学習においては、単に「漢字語彙」を知っているというだけでは不十分ですね。戦国武将のワークシートを利用した漢字学習活動を提案したグループがありましたが、そのグループの大きな課題になっていた点です。他のグループでも、漢字などの日本語についての知識だけではなく、経験や思考について話し合われていました。そこで、次に、学習言語能力とも関わりにある、思考を育むということについて、考えてみましょう。

学習言語能力については、多くの方が言及されるの、なんども聞いていらっしやると思います。日常のおし

参考

ブルームのタキソミー(教育目標分類)

改定版：アンダーソン (2001)

知識次元	認知プロセス					
	①記憶	②理解	③応用	④分析	⑤評価	⑥創造
事実的認識						
概念的知識						
手続き的知識						
メタ認知的知識						

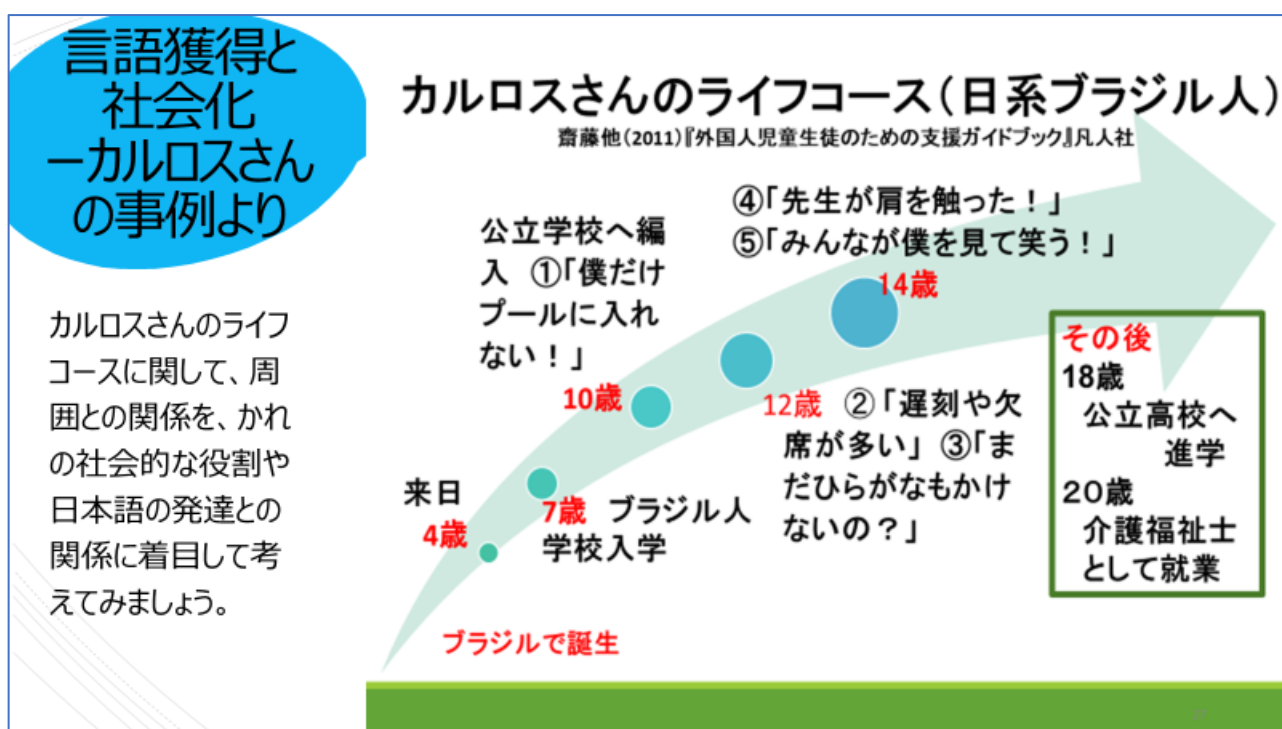
やべりとは違って、考えるのに必要な言語の力ですね。その力を高めるには、やはり、実際に認知的な負荷のかかる活動で言語を使受け意見を積むことが大事です。単語を一生懸命書く練習をして覚えたとしても、それだけで、考える力が高まるというわけではないですね。考えながら言葉を使うことが必要です。そこで、新しい指導要領の策定でも参考にしてしているアンダーソンらの改訂版「タキソミー」を紹介します。タキソミーは、「教育目標分類」と訳されています。

次の図をご覧ください。今回は、どのように知るかという認知プロセスについて、私たちが日本語学習の活動をどのようにデザインするかに関連づけて簡単に説明しますね。知識次元は、また機会があるときに学んでください。認知プロセスについて、①から⑥に向けて高まったり深まったりすると考えられています。①の記憶は、情報を認識して、「あ、こういうのがあるな」、そしてそれを思い出す段階。次が②理解ですが、「これはこういう意味なんだ」と解釈したり、「そういえばこうこうこうだから、こうだね」と例を示しながら考えたり、分類したりするということです。その後が③の応用で、今知ったことを別の場面で応用する。皆さんの学習活動案を拝見すると、まずは、記憶と意味の理解のための学習を組み立てています。その後、例えば、学んだ言葉を使って自分の感想を書く活動は、応用になります。別の場面や状況で使うことです。間違っているかどうかをチェックすれば、自分のことを⑤評価する活動になります。①の記憶と②の理解の活動に留まりやすいのですが、できれば異なる場所、異なる文脈、異なる場面で使う機会を提供して、そして、観点を定めて分析する、整理する、そして、なぜだろうと原因を考え、そしてそれを評価するような活動ができると良いですね。日本語の力が弱いので、ことばだけで活動を行うのは難しいとは思いますが、深みのある活動を、ことばを伴わせて経験させることが大事です。そうしないと、グエンさんの例で見たように、思考する力が深まっていきません。日本語の学習支援でも、日本語の漢字の学習の中でも、できるだけ、①の記憶以上の活動を取り入れるとよいと思います。

皆さんが考えた活動で考えていると、例えば、学んだ漢字を学校の掲示物から探す活動は、応用になるし、

自分の知識に照応させて分析することにもなるでしょう。「あの文字がここに書いてあるね、こういうところでも使う、こういう意味になる」と。それから、絵図やカードを見てやり取りで理解した内容を、学習した漢字を含むライトした文章を読んで確認する活動も、理解した内容を文章として確認し、漢字の使い方を学ぶ応用と考えても良いと思います。今日考えられたような工夫を、ぜひ日常的にチャレンジしていただきたいと思います。「文型を何回も口頭でドリル練習しました。」「聞いた単語を正しく書き取れました。」「ワークシートの問題が解けました。正解です。」の先を少し、工夫して、考えさせたいのです。そうして、子どもたちは皆さんと考え、学んだことを、例えば教室で、例えば友だちとの遊びの中で、例えばお母さんと一緒に公共施設を利用するときに、発揮できるかもしれません。ぜひ、お願いできればと思います。

7 言語獲得と社会化ーカルロスさんのライフコースより



最後の内容に移らせていただきます。ここでは言語獲得と社会化ということについてカルロスさんの事例から考えてみたいと思います。

<カルロスさんのエピソード>

先ほどのグエンさんと違って、カルロスさんは日系のブラジルのお子さんで日本に来たのが4歳です。7歳でブラジル人学校に通い始め、親御さんの経済的な事情があって10歳で公立学校に編入する。その後、12歳、14歳とエピソードがあるんですが、その後公立高校に進学して、20歳で介護福祉士として就業するという全体的なライフコースになっています。ここの出てくるエピソードを見ながら、周りとの関係について、彼が社会的にどんな役割、社会的にどんな関係性を持ちながら、また日本語の発達とそれがどう関わっているのかということを考えながら、このカルロスさんのライフコースの全体像を少し想像してみてください。

(グループでの話し合い)

ありがとうございます。簡単にエピソードを紹介させていただきますが、その中の②の「遅刻や欠席が多い」を次のページで詳しく検討しましょう。

まず①の「僕だけプールに入れない」は、プールカードを提出できずに、2回続けてプールに入れなかったというエピソードです。そのとき、カルロスさんは「僕だけ」とつぶやきます。日本の場合、子どもたちの安全、健康面についての学校の責務や管理は他の国よりも厳重です。水泳指導では、プールカードを必ず提出しなければなりませんし、親御さんのサインか押印が必要です。カルロスさんは、それを忘れてしまったのです。先生方に、お話を聞くと、外国のお子さんの場合は、大抵2、3回はこうしたことがあると聞きます。このエピソードの背景には、日本の学校の衛生管理、健康、安全管理についての考え方と、親御さんの認識の違いがあります。また、親御さんの日本語の力の問題も関わってイルと考えられます。

次の②は、この後話し合いたいと思います。③は、12歳のエピソードです。カルロスさんは、日本に来たのは4歳です。日本には8年滞在していますが、日本の公立学校に編集したのは10歳です。日本語での学習がスタートして2年、日本語の取り出しが週に1、2回あったとしても、平仮名、片仮名の読み書きが正しくできるようになっていなかったのです。実は、そうした子どもは少なくありません。日本生まれの小学校の高学年でも、表記が不正確というケースについても、時々耳にします。このことが、友だちとのやり取りのなかで、話題になって笑われたというエピソードです。

そして、④は身体接触や対人距離に関する感覚の差異に関わるエピソードです。先生が、宿題を忘れてきたカルロスさんに「来週まで出せよ！」と少し強めに肩に手を置いたことへの、カルロスさんは違和感を覚えます。「先生が肩を触った。暴力だ」と、お母さんに訴え、お父さんお母さんは学校に苦情を言いに来ます。ブラジルでは、暴力といいますか強めの身体接触に対しては、強い反発があるそうです。

⑤は、友だちがこっちをちらっと見た後に笑ったのを、カルロスさんは、自分を見て笑っていると思い、椅子を蹴って喧嘩を始めたというエピソードです。これまでのエピソードでお気づきかと思いますが、複雑な心境や、鋭敏に感じ取ったこと、考えたことを言語で伝えるのには、カルロスさんの日本語の力は不十分な状態です。中学校に入ってから、6年生で表記に課題があった状態は続いています。外国人のお子さんには、自分の思いや考えが言葉にならず、伝えられないもどかしさについて手が出る場合があるという話を、学校現場では話題になります。⑤はそうしたエピソードです。

では、ここで、皆さんにエピソード②について考えていただきたいと思います。

8 社会的役割の拡張

②は、カルロスさんに遅刻欠席が続いたので、どうしたのかと思って確認したら、母親と一緒に病院に行って、妹の病気の診察時の通訳をしていたというエピソードです。日本語を獲得したことによって、家族の中のカルロスさんの役割に変化が生じています。庇護のもとにあったカルロスさんが、小学校高学年になって家族の中でいちばん日本語ができる、親御さんもカルロスさんに「日本語ができる仕事：通訳」を期待しています。日本人の子どもに比べ、カルロスさんは、家族の役に立ち、通訳をしながら病院のシステムについて学び、豊に社会経験を重ねていることになります。そこで、皆さんに話し合っていただきます。社会的な役割を担い、社会経験をしていることの価値と、学習機会の保障を、どのように考えたらよいのでしょうか。カルロスさんは、家庭内で大きな役割を果たしていますが、一方で、学校を休んだために、学習機会を奪われもしました。皆さんは、どのように考えますか。グループで、話してください。教師や保護者として、どう対応すべきかを考え

てくださっても結構です。

ことばの獲得
= 社会化
⇒ 社会的役割の拡張

学校も地域も「社会」。その一員として、ことばを媒介にして参加することが重要！

子どもの言語習得

- ・社会化（その言語集団の価値観、信条、行動様式等が反映）。
- ・社会的アイデンティティの形成。
- ・内省、自身をクリティカルに分析する好機。

マイケル・バイラム、細川英雄監修・山田悦子・古村由美子訳(2015)
『相互文化的能力を育む外国語教育』大修館書店

カルロスさんのエピソード②

この2週間で、カルロスさんは3回学校を休みました。保護者から学校に連絡がなかったため、担任の先生が電話をして理由を聞きました。すると「病院に行っていた」という返事でした。翌日、学校に来たカルロスさんに、元気になったか聞くと、「病気は僕じゃなくて妹だよ」と言います。妹が熱を出したので、家族と病院に行き、自分は通訳をしたということでした。

母親は病院には必ずカルロスさんを連れていきます。医者や看護師、薬剤師との話を通訳してくれる彼を頼りにしているのです。今回は、妹がインフルエンザにかかったのに加え、弟が怪我をしたので、欠席が続いたのです。

日本語の獲得により、家族の中での役割にも変化が生じる。学習の機会の保障と家庭内での役割や社会的な経験の価値をどう考えればよいでしょうか。

(グループでの話し合い)

【受講者】私が支援しているお子さんの中にも、そういうお子さんがいました。家の都合ということで休んじゃうんです。それでも、その方には幸いにも、遠方ですが支援してくれる友だちがいたので、インフォーマルな支援を得ることができ、なんとかかんとかやっています。このグループで話したのは、例えば、病院等で、国際交流協会が提供しているトリオフォンを活用して通訳すればいいのにとということです。病院の方々がそういう制度があるんだということをきちんとわかっていただかないと、社会的資源があっても、利用に繋がらない。ただし、言語は限定されるので、少数言語のときには対応が困ることがあるという話をしました。

現在は、いろいろと便利なツールが出ていますね。それで全てが解決するわけではありませんが、いろいろなツールを使いながら、それぞれの困難や困ったことを一つ一つ対応していくことが大事ということですね。いずれにしても、母親が何か別の方法で解決できるように周りが言語環境を整備していくことと、お母さん自身も、そうした道具を使おうと努力することが必要だというお話でした。他のグループの皆さん、いかがですか。

【受講者】カルロスさんは、自分は日本語ができて役にも立っているというプライドや満足感があるんだろうと思います。でも、カルロスさんに勉強の機会を保障するには、家庭内で処理するのではなく、外との繋がりを作っていくことが大事だと思います。ただ、カルロスさんに通訳を頼まないとして、外とのその繋がりをどう作っていくんだろうか？という話になりました。

【受講者】なぜ休んだのかは、後でカルロスさんから聞きとっています。連絡帳での伝達は難しいのかもしれませんが、学校側とカルロスさんの家庭とで、何らかの連絡のツールをもつ必要があると思います。

【受講者】ちょっと、話が逸れてしまうかもしれませんが、カルロスさんは、20 歳になって介護福祉士になるんですね。命に関わる仕事に就いて、周囲からも評価は高いのだろーと思います。やはり、コミュニケーションの日本語は堪能なのだろーと思います。

はい、ありがとうございます。そうですね、事前にその事情を知っていれば学校側もお母さんにこういう手立てがあると情報提供ができるかもしれませんね。そして、この経験が進路選択、職業の選択にプラスに作用しているかもしれないというコメント、ありがとうございます。私たちも、このエピソードでカルロスさんが経験したことの意味を理解し、価値付けることが大事だということですね。

実は、今回の問いには「答え」があるわけではありません。子どもの言語獲得が社会との関わり方を変えていくのです。子どもの役割が変容して、それが学校での学習参加にも、いい意味でも悪い意味でも影響が出る。学校の中で子どもの姿だけで、子どもの行動や発言をジャッジしてはいけないという見方、考え方を、私たちはここから学ぶことができるのだと思います。私は、どちらかと言えば、このエピソードのような子どもの社会参加を、積極的に評価したいという気持ちをもっています。教員として「いいよ、いつでも行っといで」とは言えないです。けれども、彼の経験を、同じ学級の子どもたちに、「妹が風を引いて病院に行く時、みんなも着いていって世話をしああげるの？ こういう時は皆さんならどうする？」と問いかけてみたいです。日本の多文化化・多言語化の中で、十分にダイバーシティに対応した仕組みがないことを学ぶ機会になりますし、学ぶことによって社会でできることあることを学べると思います。

言語習得と社会化について、マイケル・バイラムは、『相互文化的能力を育む外国語教育』という本の中でこんなことを言っています。子どもの言語習得というのは、その言語集団の価値観や信条、行動様式等が反映するものであり、獲得をするプロセスが社会化そのものであると。社会化の過程で、他者との関係やその社会における自分のポジションや役割が変わるわけです。そこに、社会的アイデンティティが形成されます。今回であれば、家族のために病院で通訳している自分という社会的アイデンティティができたと思います。また、言語獲得によって、自分を振り返って、これでよかったんだろうかと問い直したりして、クリティカルに分析する力にもなる。さっき、日本と中国の漢字を比較する学習計画がありましたが、今まで学んできた文字と日本語の文字を比べることで、「あっ、もともとは同じ漢字だったのが、歴史の中で変わってきて、今はこんなに形に違いがある」と気づくでしょう。それも、言語習得の機会があつてこそです。クリティカルかどうかは置いておいても、そうした見方は、国によって、あるいは歴史的経緯が違うから変わったということに気づくかもしれません。こうした見方をもって社会の事象を捉え直す力にもなるのではないのでしょうか。

カルロスさんの通訳で学校を休むということについても、「学校を休んでだめじゃないの！」の一言で終わりにしないで、子どもの言語習得を、こうしたものとして意味づけたいと思います。私たちの価値観として、社会的役割の拡張があったという見方をもちたいと思います。

9 活動2 地域の活動への参加を促す

では、学校の外で、皆さんの地域で子どもたちはどんな活動をしているのでしょうか。その活動に外国のお子さん方をうまく呼び込んだり、巻き込んだりできる可能性はないでしょうか。既にボランティア活動を経験なさっているわけですが、さらに一歩踏み込んで、考えて見ましょう。子どもたちが、教えてもらっているという立場としてではなく、社会活動に自分が参加していると感じられるような場を探してみましょう。あるいは、ボランティアの活動として行ってみましょう。

このスライドは、ネットで探したものです。福島伝統行事への参加、会津若松の工芸品の起き上がりこぼしの写真を持ってきました。それから、この夏祭りや花壇づくりの写真は、福島の例ではありません。ネット上で探した町内会活動の例です。もっと身近な、例えば隣で行われている何らかの活動のほうが、子どもに参加を促しやすいと思うんですが、何かないでしょうか。

では、うちの地域のこんな活動に誘ったらどうだろうかという話し合いをしていただけますか。どうぞ。

(グループでの話し合い)

はい、ありがとうございます。具体的なアイデアや、もうすでに行っていますよとか、こんなケースありましたよという話が聞こえてきました。このグループでは「お祭りだね」と最後にお話してていました。活動参加者に、子どもがいると誘いやすいかもしれませんね。大人は仕事で忙しかったり、カルロスさんの親御さんと同じように、子どもより日本語でやり取りできないという状況があったりするでしょう。そうすると、子どもを誘って活動に参加を促すと、そのご家族が地域との関わりを結んでいくきっかけにもなると思います。

この半の皆さん、餅つきの話はどうですか。ちょっとご紹介いただけますか。また、どういう経緯でうまく参加を呼びかけられたのでしょうかね、チラシを配ったら来てくれましたというケースはあまりないと思いますので、その点も含めてお願いします。

【受講者】ある家族から「すみません、日本語教室、お休みします。地域のお餅つきに参加しています。」という連絡が入りました。その家庭は両親とも外国出身の家庭なんですが、そういった地域の行事に積極的に参加しているのはとてもいいことだなと思ひまして、そうした話を大歓迎しています。

その家族は、お子さんが日本生まれで、ご両親は日頃からいろいろな行事に積極的に参加される方です。個人的にも、夏休みに子どもたちを東京にある仕事を体験するキッズニアに連れていかれたりして、どんどん子どもたちの体験を増やしてあげたいと考えているパキスタンのご家族です。

次に、そちらの剣道のお話、いかがですか。うまくいかないこともあるかもしれないけれども、その時に配慮しなければいけないことについてお話なさっていましたので、是非ご紹介ください。

【受講者】技能実習生の話ではあるのですが、技能実習生が書道を勉強したいと言い出して、「えっ、漢字だよ」とか「難しいよ」とかいろいろ言ったんですけども、本人がやりたいというので書道の先生を紹介しました。その後、ずっと続いていて、私なんかとても及ばないくらい上手になって、市の文化祭にも出品しました。みんなに褒められて、本人も気をよくして「国に帰ったら書道の先生になりたいです。だから日本語ももっと頑張ります」という実習生が一人ます。〇〇くん頑張っているよと、ほかの実習生に言ったら、一人が「私は剣道をやりたいです」と言うので、「いいですね、剣道」と言って剣道の先生を紹介しました。お試しで道場に行ったのですが、その柔道場は大先輩に礼をする儀礼の時間があつたのですが、それが受け入れられないということで、実現しませんでした。その道場のあいさつはお辞儀であつて、お祈りではないのですが、イスラム教のその実習生はお祈りだと思ってしまったようでした。イスラム教は一神教なので、他の人をお祈りすることは許されないといひます。そして、「家族と相談して考えましたが、お祈りはできないので止めます」ということでした。「神様じゃないんだよ」と言ったんですが、やはりそこはちょっと許せないということでした。

ありがとうございます。地域の活動だけではなく、習い事のような場もきっかけになるかもしれないですね。今のイスラムの方にとって、私たちの所作・振る舞いにも、自らの文化を通した解釈があつたのですね。それが、私たちとは違つていたということだったわけですが、そういうことをお互いに学べたことは非常煮価値のあることですね。

皆さんのお話を伺つて、学校も地域も社会で、その一員としてことばを媒介にして、何らかの活動に参加することが大事だと改めて感じています。しかも、参加を通して、新しいことばに出会えますね。「餅つき」のことを漢字でどう書くのかをまなべるかもしれませんし、実習生なので、子どもとは違ひますけれども、剣道の「道」の意味を学ぶ機会になるでしょう。日々の生活とことばの学習が結ばれることが、ことばを学ぶ意味であり、学んだことばが自分と社会との関わりをさらに新たにつくり変える、つまり再編していくことになるのだと思つてお聞きしました。

10 キャリアを支援する

次に、外国人の子どものキャリアに関して考えてみましょう。かれらは将来的には日本で職業を得て、日本で生活していく可能性を秘めています。つまり、日本の地域社会の次世代になるかもしれないのです。その子どもたちに対するキャリア教育の実践例をご紹介したいなと思ひます。今、地域の話を皆さんにさせていただいたのですが、実はこのキャリア教育のポイントになるのが、外国の子どもたちが地域の実態や地域に住む外国の方々の状況を知らないという問題からスタートしていることです。

<キャリア教育の例>

このスライドには実践事例の全体像をお示ししました。具体の例は別のスライドでご紹介させていただきます。

江南中学校という浜松市の中で一番多く外国人の生徒が在籍している中学校で、水島先生がなさつた実践です。先生は、理科がご専門です。現在は静岡市移つて、日本語指導に関わつていらっしゃいます。

中学校 1 年生の 5 名、ブラジル、ペルーの生徒さんを対象に行った、「自分・まち・未来」というタイトルの総合的な学習の時間のキャリア教育です。

1 対象
中学 1 年生 5 名
(ブラジル・ペルー)
小学校低学年来日
～高学年来日
日本語のレベルは大きく異なる

2 目標
自分の置かれている社会
環境状況を把握し、自分
らしさを大切にしながら未
来（キャリア）を考える。

3 活動
活動 1：自分の町のブラジル・ペルーの人の暮らしを知る（国際交流協会・ハローワークで、居住状況や就業先・職種について調べる）
活動 2：日系移民の歴史・自分の家族の歴史を理解する。
活動 3：浜松に暮らす日系青年の語り(動画)を見て、自身の将来像をもち、その実現に向けてこれからを描く(作文)

4 先生の思い
中学では、とく高校に入るための勉強という考えになりがちだが、日本で暮らしたいと願う生徒たちの自発的な学習意欲につながっていないことが多い。その原因は、「現実社会を知らないために、夢は語れるが日本で実現するための道筋が見えていない」ことだと考えている。外国人生徒は、「ずっと浜松で生活したい」と思っている者が多い。しかし、自分の暮らす社会環境や進路に関する知識が少ない。日本人向けの「進学指導」では不十分。未来志向の生き方を考えさせる教育が必要だ。

キャリアを支援する
浜松市津江南中学校（実践時）
水島先生の実践
齋藤他（2015）より

小学校の低学年来日の生徒から高学年で来日して 1 年目の生徒までいるので、日本語の力にはかなり差があります。特に、おしゃべりの力には大きく違いがあったようです。目標は、自分の置かれている社会的環境や状況を把握し、自分らしさを大切にしながら未来を考えるというものです。活動は大きく 3 つで構成されています。

一つ目の活動は、自分の町のブラジル・ペルーの人の暮らしを知るものです。ここには、国際交流協会やハローワークから情報を提供いただき、ハローワークの担当者の方にわざわざ来てもらい就業状況について話をしてもらったりしています。そして、浜松市に住んでいる外国人の人が、どういう職種で働いているかを調べます。その活動で、調べた結果について話し合った内容を、この後、詳しく紹介します。活動の 2 として、活動 1 の後に「ブラジル人の移民のことってどうなっているの」と生徒から疑問が示されたそうです。そうした声をもとに、日系移民の歴史や自分の家族の歴史について調べたり発表したりする活動をしています。そして最後に、浜松に暮らしている日系の青年の語りを動画に撮らせていただいたそうで、それを見ます。そして、自身の将来についてイメージをもち、その将来像を具現化する、実現するためにはどうしたらいいかを文章にして書くのが 3 番目の活動です。

最初の活動 1 を紹介したいと思います。ご覧ください、このスライドは浜松の地図です。浜松に住んでいる日系のブラジルとペルーの人の人数を、町ごとに調べて、黄色い付箋に、ペルー人〇人、ブラジル人〇人と書いて貼り付けていった結果です。ペルー人が多いところには赤のシール、ブラジル人が多いところには青のシールが貼ってあります。そこで、初めて生徒たちは浜松市全体としての、日系人の数や、どこにどのくらい居住しているかを認識できたそうです。漠然と「多い」としか捉えていなかった状況を、地図に情報を書き込むことで俯瞰して把握できています。その後、外国人住民の就業状況を調べています。このスライドがそのぐら

いです。左の欄が職業の一覧で、次の欄は生徒が予想した外国人の就業数が多いと思う職業、そして、グラフの☑マークが就業者数で。ハローワークの人から提供いただいた資料をもとに、自動車整備1人、スーパーマーケット1人、というようにして、チェックマークをグラフに書き入れています。こうして、どの職業に今年、何人が就職したかを調べたそうです。

グラフで数量を整理するこの作業自体も、生徒たちにとってはとてもいい勉強になったそうです。小学校の2, 3年生で、保健室にきた理由のシールを貼ってグラフを作る学習があるのですが、ご存知ですか。データをグラフにして数量を捉えるという数学的なスキルの学習にもなったそうです。

その後、先生と生徒さんのやり取りが次のスライドです。先生が、「自動車工場や食べ物屋で働く人が多い理由は？」と聞くと、子どもから「工場が多いから」、「失業している人が多くて仕事を選べないから」、「日本語の勉強をしていないから日本語を使わなくてもよい仕事をするんだ」というような反応が返ってきたそうです。先生が、「じゃあ、デパートやスーパー、修理の仕事はなぜ少ないんだろうね」と尋ねると、「デパートやスーパーは日本語を話したり読んだりしなくてはならないから、日本語ができないから」、「修理の仕事は勉強や資格が必要だけれど、勉強していないから」と答えています。職業の種類とそこで働く日系の方々の人数を見ながら、生徒はこのように分析したそうです。ここで、仕事を得るには、どのような力が必要かを彼らなりに分析的に考察していると言えると思います。

その生徒さんの様子について、担当の水島先生はこのように捉えています。

・授業が進むにつれ、この時間を楽しみにするようになり「もっとやってみたい」というようになった。

自分で調べる、それに関心を持ってまた次、新しいことに挑むというのがたぶん楽しかったのだろう。

・資料の読み取りで、シールを貼ったり表にチェックですね、印をつけたりしながら情報を読み取っていった。

これ自体が今までだと、社会科の授業などで、資料をバツと渡されて、「どうですか」と先生が質問して、隣の子が「はい、〇〇です」とやり取りしているのを、茫然ときっと見ていたんだと思うんですけども、自分がそういうことができた。

・5人の生徒の日本語レベルには差があったが、それぞれが持てる力を使って、表を分析し考察していたのがよかった。

・「日系人ってなに?」「どうして日本人は昔、ブラジルへ行ったの?」と疑問を口にするようになった。授業はこうした生徒の疑問の解決過程であった。

自分に関わることを探求する活動は、内発的な動機付け、学びへの動機づけになるなと改めて思います。また、かれら自身が、自分が置かれた状況を今回の学習で捉え、将来をイメージすることができたのではないかと思います。次に、この授業をされた水島先生が実践に込めた思いを紹介します。私も直接お話を伺う機会がありましたが、心動かされました。

水島先生のこの実践に込めた思い

中学では、とにかく高校に入るための勉強というくらいになりがちだが、日本で暮らしたいと願う生徒たちの自発的な学習意欲にはつながっていないことが多い。

その原因は、「現実社会を知らないために、夢は語れるが日本で実現するための道筋が見えていない」ことだと考えている。

外国人生徒は、「ずっと浜松で生活したい」と思っている者が多い。しかし、自分の暮らす社会環境や進路に関する知識が少ない。

日本人向けの「進路相談」では不十分。

未来志向の生き方を考えさせる教育が必要だ。

「中学では、とかく高校に入るための勉強というとらえになりがちだが、日本で暮らしたいと願う生徒たちの自発的な学習意欲にはつながっていないことが多い。」これは、ある意味しかたがないことかもしれません。来月、こちらも間もなく試験ですけれども、試験で5点取れるか取れないかで合否が分かれることがあります。なので、受験前には「まずは、計算を頑張って5点取ろう」とするのは、いたし方ない部分があると思います。ですが、それは受験前の対策としてはいいですけど、中学校1年から、日本語がわからないから無理と、「考えよう」と働きかけることさえないのかもしれません。与えられたドリル的な勉強で点数を取って何とかというふうにしただけで学べていない。それではだめだということです。また、生徒の実態を、「現実社会を知らないために、夢は語れるが日本で実現するための道筋が見えていない」とことと水島先生は考えています。外国人生徒は、「ずっと浜松で生活したい」と思っている者が多いのだそうです。日本の生徒には東京に行きたいとか、名古屋に行きたいという人が多いのでしょう。しかし、「自分の暮らす社会環境や進路に関する知識が少ない。日本人向けの「進路相談」では不十分で、未来志向の生き方を考えさせる教育が必要だ」とこの授業をされたそうです。

こういう思いを、きっと多くの先生方は持っていらっしゃるのだと思います。その気持ちを、教育活動としてどう展開するかが大事なのだと、この実践から突きつけられるようです。「ずっと浜松で生活したい」と思う生徒たちに、「じゃあ、浜松のことを知ろう」「浜松で、あなたたちの家族は、今どういう状況にあるか調べよう」という活動で、水島先生は、自分を振り返る、自分を捉え直すという機会を提供したことが、この5人の生徒に、自分の未来を描かせたのだと思います。

<次世代を担う子どもたちの支援>

先ほど皆さんに地域の活動について考えていただきましたが、ここで、外国人の子どもたちの教育は、実は地域社会の次世代の教育だということを、改めて考えて見ましょう。

もう一つ、キャリア教育の例として、岐阜県立東濃高等学校の事例を紹介します。地元の企業の課題に対し、外国人の生徒が解決策を提案する活動です。まず、生徒が企業を訪問して、企業の事業内容や社会的成果について調べます。何を作っているのか、どこに何を売っているのか等のインタビューなどを通してです。その折、地元企業から「うちで課題に思っていることはこういうことなんだけれども、何かアイデアをくれないか」と、企業の課題解決の方策を考えるというタスクが生徒に与えられます。これを受けて、生徒はアイデアを練り、地元企業に課題解決の方法をプレゼンテーションで提案をしました。例えば、餅を作っている工場には、新しい餅のパッケージのアイデアを出し、それが採用されたそうです。そうした活動をする中で、生徒は地元企業の魅力を捉え、その魅力を同じ高校の日本人生徒にプレゼンテーションを行ったそうです。

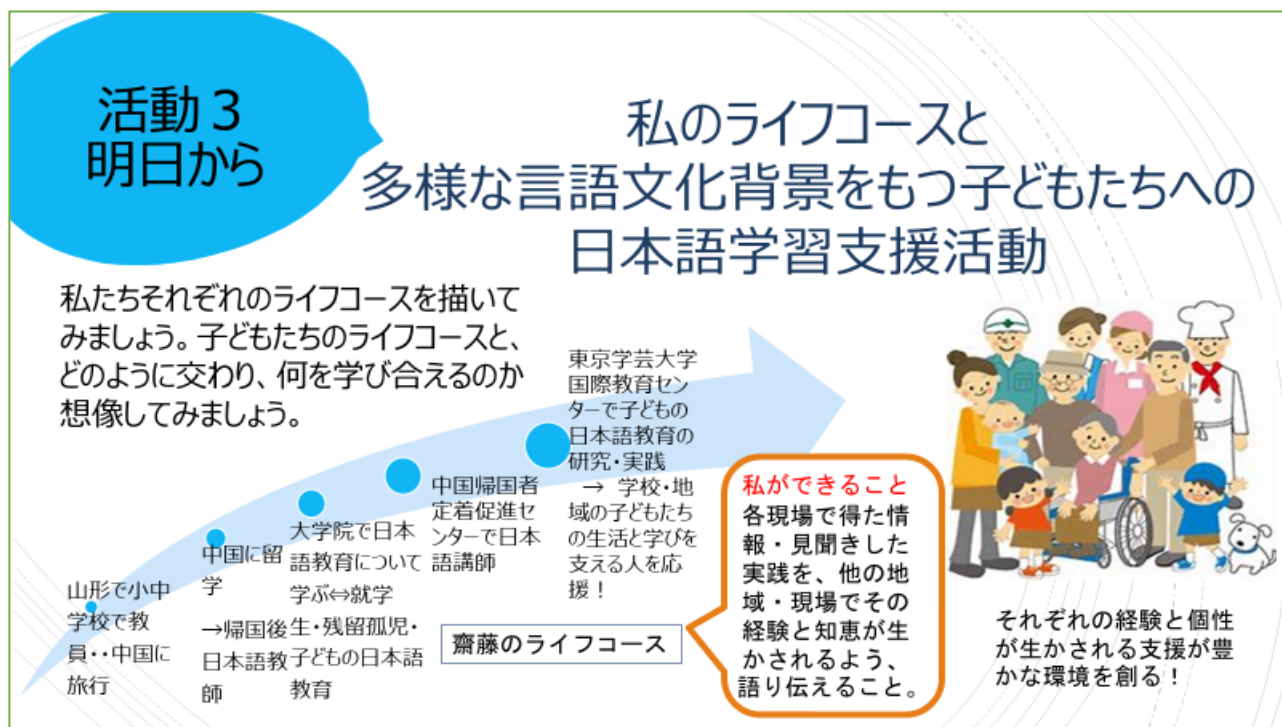
さっきも話題になりましたが、地域に居住してはいるが地域とは没交渉で関りをもっていない場合、その外国人の生徒が、将来、この地域を担う若者になっていくことは難しいでしょう。かれらを、地域と結び合えるところに、皆さんが手をつないで伴走して、引き込んでいただけたらと感じているところです。皆さん方が手を伸ばしてネットをつくる相手は、学校だけではなく、ハローワーク等の就業関連、児童相談所等の福祉関係、そして医療機関と町の産業であつたらと願います。学校の教員だけでは、かえって難しいところです。先生方は、学校の日々の仕事で精一杯なようです。皆さん方は、一人一人が多様な経験をしてここにいらっしやいます。その経験を、是非子どもと学校、そしてそれ以外の関係者を直に結べるように、力を貸していただけたらと思っているところです。

11 活動3－私のライフコースと多様な言語文化背景を持つ子どもたちへの日本語学習支援活動

<私たちのライフコース>

最後の活動です。私のライフコースと子どもたちへの日本語学習支援活動を関連付けてみたいと思います。私のライフコースがこのスライドです。大学の教育学部を出た後、山形で小中学校の教員をしていました。その間、中国に旅行に行きました。そこでさまざまな刺激を受け、教員をやめて中国に留学してしまいました。親からは叱られましたし、学校にも迷惑をかけました。その後、帰国して、仕事として目の前にぶら下がっていたのが日本語教師でした。ちょうど、1990年になる手前で、日本語学校が雨後の筍のように乱立していた時代です。「教員免許、持っていればいいよ」と言われて、民間の日本語学校に採用されました。ですが、その頃は、日本語教育については何の専門性もなかったもので、大学院で日本語を学ぶという選択をしました。その時、就学生や中国残留孤児の子どもやインドシナ難民のベトナムの子どもとも出会いました。そのころは、大学院に通いながら生活しなければいけなかったもので、いろんな所で時間講師などの仕事を通して出会ったのです。その後、中国帰国者定着促進センターで日本語の講師をした後、東京学芸大学の国際教育センターというところに勤めました。そこは、外国人の子どもたちや帰国子女教育の実践研究をする機関でしたが、そこで、本格的にこの領域について勉強したり、あるいは情報を集めて皆さんに提供したりするようになりました。

そして、それからはずっと学校や地域の子どもの学びを支える皆さんを応援している立場です。私が子どもに直接教えたのは、中国帰国者定着促進センターまでです。その後、ボランティアで母語保持教室を暫く運営していたのですが、今現在は、直接は子どもには教えていません。皆さん方のように教え、支援する方をバックアップというようにして活動しています。



暫くぶりに、中国帰国者定着促進センターで教えた子から「子どもができました」と年賀状が来たりするわけですが、こうした私のライフコースと、子たちとの接点にはどのような意味があったのだろうか。この正月に、私は何で貢献できたのだろうかかと振り返ることがありました。その結論として、いろいろな立場でいろいろなご経験を持っている人が支援をすることに価値がある、私もその中の一人になっていると思うこと

にしました。教員免許を持って、日本語教師のエキスパートであるからいい支援者だというよりは、その人がもつ、この地域に住んで経験したこと、いろいろな立場の方が関わってくれることが、子どもの学習環境を豊かにするのだと思ったわけです。

<活動3 自身のライフコースを描く>

そこで、少し気恥しいかもしれませんが、皆さんも、私のような矢印を一本書いて、私はこんなふうに生きてきました。私のこの経験が、子どもと接するときにこんな面で資源になっているようだと考えてみていただけたらと思います。私自身は、中国に留学したことで多少中国語ができるので、中国の子どもたちが来日直後に何もわからないときに、その言語を使いながらサポートで来たと思うことがありました。また、小学校で教えていた経験があることが、外国人の子どもたちが教科で困っているときのサポートに生きたなと思うことがあります。まず、皆さん自身のライフコースを差し障りのないところで結構ですので、書いていただけますか。どうぞ。

（自分のライフコースを書く）

ありがとうございます。だいたい書けたかと思いますけど、おおよそで結構です。では、皆さんが経験されたことが、今後どのように生きるのかを考えていただきたいです。私の場合、マイナスのこともいっぱいあります。中国に留学したときは、その頃、日本の大学から日本人学生の留学生がたくさん来ていました。みんな楽しく遊んでいるんですね。私には、その後の人生のかかった一大勝負でしたし、親に借金して来ていたので、必死で勉強していました。その学生さん方には、非常に冷たい態度を取っていたと思います。また、中国の文化を受け入れられずにもいました。その時の自分のことは、よく頑張ったという気持ちもあるんですけども、なぜ、何のために勉強するのかは、実は余りハッキリしていませんでした。文化概念なども何ももたずに、留学生していましたし。本当は、そういうことがやはり大事なんだと思います。一方で、必死で学んだ時の自分の学び方が、学習で困難を抱えていたり苦労している人とやり取りをしたりするときに「それは簡単には覚えられないよね」と言って、そのことを受け止められるようになっているのだらうと思っています。

皆さんの矢印のライフコースの脇に、皆さんが経験されたことで今後生きてくるということを書き加えていただけますか。もし、実際に今支援している子どもがいれば、「私のこういうところがこの子どもにとって提供できる資源になっている」というように。

例えば、私のマイナスなケースですね、児童養護施設から通っていたベトナム人の生徒がいました。中学生でしたが、私は、週に2回、取り出しの日本語指導を担当していましたが、なかなか勉強に向かってくれませんでした。そして、結局、その子は途中から学校に来なくなりました。勉強に関心を持たせてあげられませんでした。このことを、どう考えたらいいいのかと、今でも、私が子どもと接するときに心にあります。そうした経験が、授業中這いつくばっている子どもを見たときに、怒ってもダメ、ではどう接したらいいのかと、考えられる今の自分があるんだと思ったりもします。もし、開示してもかまわないようなことがあれば、私のような経験や、子どもとの接し方の失敗が、自分の今の資源になっているというようなことも、書き込んでください。

他には、私が存じ上げている支援者の方の例を紹介しますね。理系の研究所を退職された方が、ボランティア教室で、中学生の生徒のクラスで、水電池の実験をいとも簡単にやっていました。学校の先生も四苦八苦しているのに、それを紙コップでパッパと作って、「こうやったら電流は流れるんだよ」と。学校では、何もわからない子や、実験の時はいつも遠巻きにクラスメイトがやっているのを覗いている子が、楽しそうに実験していました。職業的に得られた専門の知識も生きると思います。そういうことを是非、書いてください。

(5分作業をし、グループで共有する)

<異領域との協働>

ありがとうございます。皆さんたっぷりお話しされたようですね。多くの皆さんが、日本語教育や子どもの支援になぜ興味を持ったか、関わるようになったかというお話もされていました。私は中国から帰って来て、たまたま、日本語教師になったのですが、皆さんは、はっきりとした意志のもとに、この活動に関わっていらっしゃるのですね。そのお気持ちとエネルギーを、福島のためにそれから子どもたちのために、そしてここで考えていきたい社会全体のために活かしていただけたらと思います。私が言うのもおこがましいですが。

学校の先生方の集団に比べると、こちらにお集まりの皆さん方は、違った背景をもつ人のグループ、集合体です。別な言い方をすると、異なる領域で活動してきた異なる経験を持つ人同士が集まっています。それはとてもいいことだと私は思っています。その一つの理由として、子どもを取り巻く新たな課題として注目されているのが、スライドの左側に挙げているようなものです。保育、幼児教育、生まれたばかりの子どもですね。小学校に入る前の教育をどうするか、プレスクールなどがあちらこちらにできていますけれども、そこを、システムを作ってもっと充実させていくことが必要です。この年代だと、保護者、家庭の教育も一緒に行う必要があります。その点で、学校の教育、日本語の教育の専門家だけでは十分ではない側面があります。

次に、高等学校進学後の学習保障の問題です。今日はデータを出してはいませんが、文科省の調査結果では中退率が日本の高校生よりも7倍ぐらい高いんですね。9.6%だそうです⁶。せっかく、頑張って勉強して高校に進学してもドロップアウトしてしまう。その大きな理由の一つが、日本語がよくわからないということです。勉強がわからない、馴染めない、それで中退してしまう生徒が多いというなかで、高校進学後の学習保障をどうするかが、今までの義務教育を中心にした仕組み作りでは不十分なのです。高校以上になると、子どもたち、学校と家だけの暮らしではないですね。友人関係も学校を飛び出して、地域の活動で、あるいは広域の集団で行動し始めます。そうしたとき、さまざまな社会の経験をもつ皆さんとの接点があることの意味は大きいのです。

それから、先ほどグエンさんエピソードで少しお話ししましたが、特別支援のニーズの問題も浮かび上がっています。また、日本の子どもの貧困が近年問題になっていますし、経済力と学歴の長さとの関連性については社会的に注目も集めました。そして、前から言われていることですが、この貧困と教育の問題が如実に表れるグループが、外国人の子どもたちです。

そして、在留資格と就業の問題です。法律も関わってくるので、「一生懸命勉強しようね」と情熱だけでは解

⁶ 文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成30年度）」の平成29年度中の日本語指導が必要な高校生などの中退・進路状況の資料

https://www.mext.go.jp/content/1421569_002.pdf

決できない部分があります。こういった点も含めるとやはり、さまざまな専門の人が情報を交換して、教育の問題、あるいは子どもの成長発達の問題について向き合っていく必要があると思います。

地域の教室というのはある意味、異領域の共同体の縮図みたいなところがあります。「日本語教育の経験が少ないんです。専門に勉強していないんです」と卑下するよりは、「私はこの経験があるんです」と、ご経験を前面に出して、支援をしていただきたいと思います。

1 2 専門性向上のために…対話を通した内省

最後になりますけれども、今日の皆さん方の話し合いが、まさに専門性向上のための対話を通した内省であったと思います。グループでの活動は、対話そのものでした。次のスライドは、文部科学省が出している外国人児童生徒教育を担う教員の養成研修モデルプログラム開発事業の、資質・能力モデルです。2017 年度から2019 年度にかけて開発されているものです。外国人児童生徒等の教育を担う教員・支援員の資質能力には4つの要素、8つの課題があると提案されています。

一つは子どもを理解することや、子どもの実態理解や社会背景の理解、歴史的社会的背景の理解、これを「捉える力」と考えます。それから日本語を指導し、教科の力を育むような教育の力、本人及び周囲の子どもたちや大人の異文化間能力を涵養する力、多様な文化に対して開く力や調整できる力等を含めて「育む力」と呼びます。また、今日、「地域づくり」の話をしましたが、学校内を結び合い全体として教育をしていく「学校づくり」、そこには、学校内の先生方の意識や、地域住民の多文化共生の意識を育むことも含まれるのですが、「つなぐ力」があります。

そして、最後に、この教育活動を通して子どもの日本語の力を高める、子どもの学力を高めるだけではなく

文部科学省「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」
(公益社団法人日本語教育学会受託)
「資質・能力モデル」

資質・能力	課 題
捉える力	子どもの実態の把握
	社会的背景の理解
育む力	日本語・教科の力の育成
	異文化間能力の涵養
つなぐ力	学校づくり
	地域づくり
変える／ 変わる力	多文化共生社会の実現
	教師としての成長

「捉える力」「育む力」「つなぐ力」が相互に関わりながら実践を動かし、「変える・変わる力」がそれを推し進めるというイメージ



専門性向上のために…
対話を通した内省

て、多文化共生の実現が可能な社会に「変える力」や、自分自身が教師としてあるいは支援者として意識的に成長する「変わる力」があります。合わせて「変える／変わる力」としています。「変える／変わる力」については、他者と対話を通して、あるいは読んだものでもいいです、そこに描かれているもの・書かれているものと自分がもっているもの・考えているものを交流させながら、自分の今を内省し、変わるべきところは変え、

維持するところは維持します。あるいは、相手とのやり取りの中で相手の考え自分の考えに対して第三の考えを作っていくという力が、「変える／変わる力」です。

今日グループ内でたくさん話し合いをしていただきました。もちろん大きく変わりましたという方はいらっしゃらないかもしれませんが、けれども、子どもの姿について、私とは違う見方をする人がいるとか、教えることについての考え方が違う人がいるということを、対話や作業の中のやり取りを通じて感じられたのではなかと思います。そのことを、ある寛容な態度で受け止めつつ、私は目の前の子どもに私の考えや理念をもってどう接していくのかを考えられたと思います。この対話による気づきを、明日からの活動に反映させていただけたらと思います。それが、皆さんの専門性の向上になると思います。

こちらのグループには、「社長を25年したけど、別にぼくは」とおっしゃっている方がいました。「校長も大変なんだよ」と受け止めていらっしゃったのですが、集団のトップに立って現実の問題に対処しなければならない立場を経験されたからこそその発言だと思います。その意見が聞けたから、私は、理想だけを大声で叫ぶことについて、一度立ち止まって考えることができました。理想を言う前に、現実の問題をどう捉えたらいいのかと捉え直しができたのかもしれません。実は、対話を通した内省は、お互いがお互いにとっての資源になって、支援者としてさらに成長する、いいえ、人間として豊かになるということだと思います。

子どもの支援活動やここに集った仲間との活動を通して、社会的な役割を使命として果たしていく、豊かな時間を、これからもつくっていただきたいと思います。それが、子どもにとっての深みのある環境になっていくと思います。以上です。皆さんおかげで、私もとても元気が出ました。ベトナムの中学生の支援で、心を痛めたころを、久しぶりに身体的に感じたりもしました。それも私にとっての大きな収穫です。ありがとうございました。

【課題】 11回の研修を受けた感想を書く。